

---

# 平穩なる日々 Another-story

蒼い鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平穏なる日々 Another-story

### 【Nコード】

N5312D

### 【作者名】

蒼い鳥

### 【あらすじ】

幼きころ、少年と少女は出会った。でも、その時から運命は決まっていたのかもしれない。時が立つにつれ彼（少年）と彼女（少女）の距離は開くが、ある日幼きころと似たような光景が広がり……

## 挨拶

この小説は羽沢 将吾先生著書の

『それすらもただ平穏なる日々』 & 『それすらもまた、平穏なる日々』

(以下平穏なる日々と呼ばせていただきます)

の2次創作であり、本編とはあまり関係がございません。

この小説のことで羽沢 将吾先生に迷惑をかけることはご遠慮を願います。

なお、この小説は作者の自己満足に近い作品ですので評価はいただけてもコメントいたしません。

なお、この2次創作を作ることをご許可してくださった、羽沢 将吾先生に盛大な感謝を

この場をお借りしまして申し上げます。

蒼い鳥

## プロローグ（前書き）

これから平穏なる日々が続きますが、  
一部本家とは違う設定になります。ご了承ください。

## プロローグ

シトシトと雨が降っていた。

静かな街路地のすみに小さな少女が傘も差さずに突っ立っていた。

少女の着ているワンピースはすでにずぶぬれになっており、少女は大粒の涙を流しながら泣いていた。

時々、通りかかる大人は彼女を見ても、知らないふりをして通り過ぎていく。

・・・・・・・・・・

さらに数分後、親とはぐれたのだろうか？

その年では至って普通に見える少年が傘を差しながら少女の近くまでふらふら来た。

少年は少女を見つめていたが、我関せずと通り過ぎてゆく大人を見て彼は、よくわからないもやもやした気持ちになり、勇気を出して少女に近づいた。

・・・・・・・・・・

近づいたはいいが何をすればいいか？わからず、戸惑ってしまふ。

少女は少年に気づかず泣いたままにいる。

少年は差している傘を少女に傾け濡れないようにした。

もちろん、少年は濡れるはめになったが。

少女は冷たい雨の中で苦しそうに泣いていたが、自分に雨が当たっていないことに気づくと近くに

少年がいてとても驚いてあっけにとられてしまったようだ。

少年は濡れながら笑顔で言った。

「大丈夫？」

その一言で少女は何か不思議な気持ちになり思わず笑ってしまった。  
「どうしたの？何で泣いているの？」

少年は聞かずにはいられなかったようだ。

とたんに表情を曇らしながら少女はぽつぽつと話し始めた。「お父さんとお母さんの仲が悪くて、・・・のこといらない子だって・・・とても悲しくなって家から飛び出してきちゃったんだ。」

少女の目にまた涙が浮かんできた。

少年はまずいと思ったのか話をそらそうとして聞いた。

「・・・？」

「私の名前だよ。」はにかみながら教えてくれる少女。

「いい名前だね。」柄にもないことを言ってしまったためか顔を赤くする少年。

「ありがとう。名前をほめられたの初めてだよ。あなたの名前は？」  
「ボクの名前は・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

それから建物の下に移動し雨宿りをしながらちよつとした話をする。  
わかったことは、年が同じで家の場所を教えてもらったくらい。  
後は少年にとって難しい話係でちんぷんかんぷんのような。

あつという間に時間がすぎて少女は帰らなければならなくなったようだ。

少年は名残惜しかったのか思わず聞いた。

「今度遊ばない？」

「いいよ。家に遊びに来てね。」

少女は最後にそういうと少年そばによると

少年の唇と少女の唇が触れた。

少年は何されたのかわからずパニックに陥ってしまったようだが、

少女は離れ

「お礼だよ。じゃ、またね。」

そっぴいなから去っていく。

少年はほを赤くしたままボーツとしていたが寒気を感じてくると急いで帰った。

余談だが、次の日に40度超える熱を出し倒れてつらいめにあったのは言うまでもない。

.....

このときがたぶん少年の初恋になったのだろう。

そしてそれは運命と呼べるだろうか？

この十数年後再び時が動き始める

運命1 新たな日々・前編・（前書き）

のんびりとした話になるのはまだ先になりそうです。  
それまで少々お待ちください。



## 運命1 新たな日々 - 前編 -

目覚ましがけたたましくなる。

彼はいつもどおり布団にもぐったまま

ポチィ

目覚ましは今までに数えられないくらいの敗北をまた1つカウントし鳴り止む。

彼、奈留概なるがい 秀シユウ 17才にとって目覚ましは無力に過ぎないようだ。哀れ目覚まし時計。

すると、すでにそのことをわかっているかのごとく部屋へと入ってくる少女。

「シユウお兄ちゃん、おきないと学校遅れるよ。今日から学校統合で遠くなるんだから

早く起きないとだめだよ。」

シユウは忘れてたとばかりに起きた。

「そうだった。忘れてたよ。サリ」

「もう、まったく。シユウお兄ちゃんは。朝ごはん作ってるから早く降りてきてね。」

「了解。」

少女は、足立あたち 沙里サリは部屋から出て行く。サリはシユウの近所に住む

幼馴染の足立 遥はるかの妹で双子だ。

ちなみに双子の姉の足立 香奈カナはかなりお気楽なやつで天然ボケの部類に入る。

妹のサリは責任感のあるまじめな性格だ。

双子でも性格は正反対に近いのは運命のいたずらなのだろうか？

2人あわせてカナサリと呼ばれている。

少し前までは遥が起こしに来てくれたが3年の先輩が付き合ってからうざくてしょうがないので俺が断ったら、サリが来ることになった

というわけだ。

サリは小学生6年生なのかと思えないほど家事が得意だ。特に料理であり将来まだ史上1人しかない

三ツ星シェフにもなれるんじゃないかと思うほどすごい。

「おつとやばい。早くしないと。」

準備してリビングに入りイスに座る。

「おはよう。サリ」

「おはよう。シュウお兄ちゃん」

いつもどおりの挨拶を終え、朝食をいただく。

「今日も朝からすごいな。」

「えへへへ、今日もがんばりすぎちゃった。」

朝とは思えない料理をいただく。

「うん。おいしい。サリは将来立派なお嫁さんになるな。」

「もう、シュウお兄ちゃんたらほめても何もならないよ。」

顔を赤くするサリと殺し文句を平気で発言するシュウのいつもの会話である。

時刻は7時50分

「さて行くか。」

「うん。」

いつもなら8時に出ても間に合うのだが学業カリキュラム変更のためシュウの通っている

桜ヶ丘学園と聖嬢学園が統合することになりちよつと遠くなったのだ。

名前は聖嬢桜ヶ丘学園と何のひねりもない。頭の堅い人たちが決めた名前だ。

どちらも私立学園だが試験校として国から補助が出ているので公立校と同じくらいの学費で

勉強でき、施設などがなかり充実しているためかなりの人気校だったのだが、

公立でも近年いろいろな問題などで私立に劣らない学業成績になってきたので

お互いの学園で使用しているカリキュラムを変更し生徒たちの学業成績を上げるのが目的らしい。

サリと一緒にマンションを出る。小さなマンションであるが設備がよくかなり高いらしいのだが

事故で死んだ親がコネだけは何故か無駄にあり、死んだときに遺産相続や保護施設に入らなければならないことなどを

すべて処理してくれたのは本当にありがたかった。

その人が一人で住むならこのマンションを格安で譲ってくれたのだ。今はバイトしながら安定した生活をしている。

「じゃ、私はこっちから学校行くね。」

「ああ。」

サリは笑顔で走っていく。思っただがおばさん。かわいい娘をなんなに放置して大丈夫なのですか？

自転車に乗りゆっくりと行く。30分くらいで丘の上に学校が見えてくる。

そこが聖嬢桜ヶ丘学園だ。一番の不満は統合して新しい学校を作ることはいいいのだが

なにゆえまた、丘の上に学校を作ることはどういうことだといったい。

理事会はそんなにSだらけなのか？と疑いたくなる。

自転車組にとって朝はかなりきついことこの上ない。

徒歩組を恨めしそうに見ながらのぼり無事到着。

自転車を置きクラス分けの掲示板に行こうとするが、人だかりが多すぎてみることはおるか近づくことすらできない。

人だかりの中には見慣れた桜ヶ丘学園の制服を見るが、それ以外の見慣れない制服はどうも聖嬢学園の制服らしい。

「おおい。」

声のするほうを見ると中学時代から仲の良い深見<sup>ふかみ</sup> 幸一<sup>こういち</sup>だ。

「よお。人ばかりでどこのクラスわからないんだが・・・」  
思わず不満を漏らしてしまう。

「安心しろ。俺とシユウはC組だ。」

「気が利くな。サンキュー」

「気にするな。」

いつもと同じような会話をしC組に向かう。

C組の扉を開くと中では学園問わずいろいろな人が話していた。  
シユウと深見は後ろの席に適当に座る。席の順番を自由。

「あれ？深見、あやつはどこ行った？」

「ん？あやつって誰だっけ？」

「ほら、俺とお前ともう一人いたじゃないか。」

「ああ、Yかあゝ」

「ん、な訳あるかあゝ。」

激しいツツコミが二人を襲う。周りは何かと見つめてくる。二人は  
他人のふりを決め込んだ。

「ちよつと無視かよ。ねえゝ、ねえゝつてば。・・・・・・こ  
めんよゝ」

このどうしようもない弱者に見えるアホが二人の言うあやつであり  
名前を飛閃<sup>ひせん</sup> 優衣<sup>ユイ</sup>である。念のため説明するが男である。

シユウ「ったく。本当にお前はイタイな。」

深見「俺らの友だということが恥ずかしくて仕方ないよ。」

ユイ「うう、悪かったよ。」

二人は言いたい放題である。いつもいじられるのは彼のスタンスで  
ある。

シユウ「で、何のようだ？Y」

ユイ「だから、Yっていうなゝ」

大絶叫するユイ。周りは怪しい三人組に我関せずと知らないふり。  
シユウ「わかったよ。なんだよ、ユイちゃん」

ユイ「その名で呼ぶな」

深見「どちらでもいいだろ。」

深見に一撃必殺クラスの手刀がユイのみぞおちに華麗にヒット。

もたえるユイ。彼はやはりこういうキャラである。

シュウ「最後のチャンスだ。聞くぞ。何のようだ？。優衣ちゃん」

ユイ「だから俺はその名で・・・」

とそこでシュウの顔を見て口を閉じる。周りは男が『優衣ちゃん』と連呼するのでなにやらこそこそ話を始めている。

ユイ「あうう」

うなだれるユイ。

シュウ「お前はそういうキャラなんだよ。」

深見「激しく同意。」

ユイ「だから毎回言ってるだろ。母親が美少女趣味で男でもかわいければいいみたいな考えの持ち主だつて。」

シュウ「安心しろ。その辺は理解してるよ。」

深見「いえ」

ユイ「お前らがどうも信じられんのだが・・・」

これはもちろんいつものやりとりである。

・・・

悪友三人組は桜ヶ丘学園時代に学校でかなりの知名度（悪い意味）で知られ、近隣の学校でもかなり警戒されていた。周りの工業高校の不良どもですら、三人組の名前を聞くとかなりおびえるらしい。

メンバー１ シュウ 親のコネの関係もあり政府のお偉いさんや危ない職業の人とかなりの人脈を持つ。親から教えられた武術は無流という型が戦闘によって変わるというめちゃくちゃなモノ。そのため戦闘を実際体験。主に乱戦が得意。

メンバー2 深見 野球部のエースだが、かなりのS。中学校時代は先生からも恐れられる問題児だった。シュウと出会うことにより変わった。だが、いまだに力は健在。しかし、本領は相手の戦略を見切るなどの戦術家。

メンバー3 ユイ はつきり言って力は喧嘩に関しては無力。というより喧嘩の戦い方がわからないというほうが正しい。事前に相手の情報を得たり相手の弱みを握ったりと情報戦専門。

この三人組はかなりの問題児である。外見は優しく、普段はやさしいが。いたずらなどに関しては異常なまでの才能を発揮する。

.....

そこでいきなり怒声が鳴り響く。

「飛閃！！理事会に盗聴器を仕掛けるとはどういうことだああああ！！！」

教室に怒鳴りながら入ってくるのは、元桜ヶ丘学園の教師尾尻おじり 徹てつだ。

ユイ「やべっ！！見つかるとは思わなかったわ。シュウ、深見、後は頼むわ」

シュウ「ああ、がんばれ」

深見「俺は知らない。」

二人の声を聞くと泣きながら尾尻の入ってくるドアと反対側のドアへ行き逃げるユイ。

「まてえ〜。今日こそ逃がすか〜」

死ぬ気で追いかける教師はまるで嵐のようだ。

周りは何が起こったのか理解できず呆然としていた。だが、すぐに三人組を知る桜ヶ丘学園の生徒は聖嬢学園の生徒に説明し、いつもの空気に戻っていく。

深見「んじゃ、俺はちよっくら出かけてくるわ。始業式でなんかいわれといたら頼む。」

シュウ「了解。」

シュウは一人になるとかばんから親が残した無流の武術辞典を読み始める。

何せ戦闘の状況によって型を変えろという技なため、覚える数が半端ないためだ。

シュウの場合はすべて覚えているのだが、使わない状況などが良くあるため忘れないために日ごろから読み直してるわけである。

そんな cand で、先生が入ってきて悪友二人がいない状況でホームルームがスタートした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5312d/>

---

平穏なる日々 Another-story

2010年10月11日02時22分発行